

平成 29 年度「T-GAP」実践報告

～ソーシャル・アクション型授業の開発と実践～

加藤敦子 中井毅 栗飯原匡伸 吉田賢一
藤野昌哉 市川友紀也 金城幸廣 吉岡静

ソーシャル・アクションに取り組む学校が増えつつある。国際バカロレア・ディプロマプログラムの CAS 活動もそうだが、生徒自らが社会課題を設定し、その解決に向けてアクションを起こすことが期待される。国際的に社会的起業（Social Entrepreneurship）が注目される中、高校生がソーシャル・アクションに取り組む意義は大きい。

そのため、本校は2年次にてグループでソーシャル・アクションに取り組むための授業として「T-GAP：つくさかグローバル・アクション・プロジェクト」という授業を開発した。本小論は、SGH に指定されて以来、開発を重ねてきた成果を報告する。

キーワード ソーシャル・アクション 社会課題 共創的対話力 課題研究

1. はじめに

本科目はSGHの研究開発科目である。一年次「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「グローバル・ライフ」等の科目で、複数の社会課題を扱った。しかしながら、社会課題を知るだけにとどまらず、その解決に向けて実際にアクションしてみることが大切である。よって、2年次「T-GAP」では、社会課題を設定し高校生ができる解決策を考えてアクションしてみることが期待される。

「T-GAP」は、グループでソーシャル・アクションに取り組むことによって、以下の資質・能力・スキルを身につけさせることを目標とする。

- （1）自ら社会課題を設定し、解決に向けて考えて動く力＝「考動力」
- （2）設定した社会課題の解決に向けて、グループで取り組む力＝「協働力」
- （3）アクションした内容を適切なスタイルでプレゼンし文章にまとめる力＝「課題研究汎用スキル」

本校のSGHは、その目標のひとつとして「共創的対話力」を掲げている。グループで課題発見・解決活動に取り組むことは、「共創的対話力」を育成するひとつの方法であると考え、「T-GAP」の開発を決断した。

2. 科目概要

- ・教科：学校設定教科「国際科」 学校指定必修修科目
2単位
- ・担当：2年次学年団8名
- ・評価：5段階で評価し評定する。

3. 科目内容

「考動力」、「協働力」、「課題研究汎用スキル」を身につけることができるように、以下の3つの学習ステージを開発した。

（1）ASEAN Studies（4月～5月）

生徒は、ASEAN 各国の概要、及び与えられたテーマについて個人で調査する。調査内容に基づき、質問・疑問を練り、5月27日（土）に「AIMS 留学生との交流会」でASEAN からの留学生に英語でインタビューできるように準備する。

生徒は、ASEAN Studies を通じて、各種白書・統計等を検索し、その情報からインタビュー内容を作成する。一連の流れを通じて、基礎的な課題研究汎用スキルを練習することが期待される。

（2）GAP 活動（6月～11月）

生徒は、グループに分かれて何らかの社会課題を設定し、解決に向けてアクションすることが求められる。6月中に社会課題の設定と活動企画書を作成し、夏休みにアクシ

ンする。そして、10月の中間発表を経て、活動報告レポートの作成及び最終発表に臨む。

一連の経験を通じて、生徒は「考動力」を鍛え、グループで対話しながら「協働」する力を養うことが期待される。

(3) 卒業研究に向けた準備 (12月～翌年3月)

3年次必修科目「卒業研究」の完成に向けて、12月より研究構想を練る。そのための基盤的なスキルとして、資料検索方法や資料引用方法について復習する。加えて、先行研究レビューの作成に取り組み、卒業研究を進めるうえで必要となる課題研究汎用スキルと視点を得る。

4. 今年度の授業内容

(1) ASEAN Studies (4月～5月)

①テーマ選択と事前調査

まず、ソーシャル・アクションへの助走として「ASEAN Studies」に取り組んだ。いきなり社会課題を設定して、アクションすることは難しい。そのため、まずは教員がASEAN地域を事例とした社会課題・テーマを複数提示し、その課題について生徒は事前調査する。そして、調査段階で生じた疑問を、ASEAN各国からの留学生に英語でインタビューし、後日まとめるというミッションを課した。

②AIMS 留学生交流会

AIMS プログラムは、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、フィリピン、ブルネイ、日本が参加する学生交流プログラムである。筑波大学は、AIMS プログラムに基づき、多数の留学生を東南アジア諸国から受け入れている。

「T-GAP」は、筑波大学に留学中にアセアン留学生を40名招待し、交流会を開催した。

生徒は、事前に割り当てられた国ごとにグループを作り、その国からきた留学生に、事前調査の際に考えた質問を英語でぶつけた。留学生2～3名に対して、生徒10名前後というグループだったため、英語でコミュニケーションをとる練習として、最適だったと思われる。



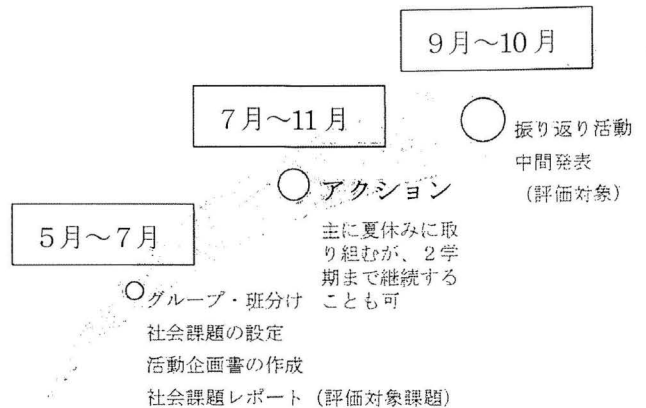
(生徒は車座になり、留学生に質問した。)

③振り返り、及び評価活動

「ASEAN Studies」の振り返りは、活動報告レポートの提出をもって実施することとした。生徒は、事前調査の内容、英語質問、インタビュー内容のまとめと考察、及び所感を1,200字程度のミニレポートにまとめて、提出することが求められた。評価指標とルーブリックについては、資料を参照されたい。

(2) GAP 活動 (6月～11月)

GAP 活動、すなわちソーシャル・アクションは、以下の手順で実施した。



①グループ分け

今年度は、生徒のニーズや教員側のモニタリングのし易さを考慮し、4つのグループを設定した。生徒は1つのグループを選び、同じグループを選んだ生徒同士が4～5名の班を作り、GAP活動に取り組む体制を作った。以下、各グループの概要を紹介する。

「A グループ」

本校には、部活動やその他の課外活動に熱心に取り組む生徒がいる。このことは、素晴らしいことであるが、グループでソーシャル・アクションに取り組むうえで、日程調整等において困難が予想される。そのため、今年度は、そのような生徒に配慮するため、何らかの社会課題に取り組む既存の活動に参加することをもって、T-GAPの活動として認めることにした。具体的には、自らが興味のある社会課題を扱う既存の活動、たとえばNPOや社会福祉協議会が行う活動に参加し、同じ社会課題に興味のある生徒同士が班を組み、振り返り活動やプレゼンテーションに班として臨んだ。

「B グループ」

PDCAを1から回すことを目標とするグループである。生徒は、4～6人が班を編成する。そして、班内で解決に挑む社会課題を設定し、高校生が取り組むうえで妥当性のある解決活動を策定し、アクションする。その際、活動の妥当性を判断するために、教員だけではなく、当該

の社会課題を扱う外部団体、具体的にはNPO、行政機関、企業等からアドバイスを受けたうえでアクションするように促した。最終的に、班内で振り返り活動を行い、プレゼンテーションに臨んだ。

「C グループ」

社会的な課題に対するアプローチの場として、東日本大震災以降の福島県いわき市周辺部をフィールドとして、調査・研究活動を行うグループである。夏休みを利用して、宿泊を伴う大規模な調査ツアーを行いながら、福島県下の行政機関、NPO 法人、企業等の助言を受けながら、社会的な課題を発掘していく。また坂戸市内の福島の子どもたちの支援団体「郡山の子どもたちと遊ぶ会」と協働で子ども支援ボランティアを7月下旬から8月上旬まで行った。またこれらの調査においては、生徒たちが主体的に外部のクラウドファンディング企業で調査費を募集し、多くの協力を得た。最終的に、班内で振り返り活動を行い、プレゼンテーションに臨んだ。本グループは、T・GAP の授業内課題に加え、グループ選抜時に復興庁の Web サイトを読んだレポート課題 2000 字以上、夏休み明けの調査報告 4000 字、黎明祭（文化祭）での発表を課した。

「D グループ」

PDCA を1から回すことを目標とするグループである。ただし、「B グループ」と違って、社会課題や活動の内容に「グローバルな要素」を取り入れることを必須とした。生徒は、4～6人が班を編成する。そして、班内で解決に挑む社会課題を設定し、高校生が取り組むうえで妥当性のある解決活動を策定し、アクションする。その際、活動の妥当性を判断するために、教員だけではなく、当該の社会課題を扱う外部団体、具体的にはNPO、行政機関、企業等からアドバイスを受けたうえでアクションするように促した。最終的に、班内で振り返り活動を行い、プレゼンテーションに臨んだ。

②活動企画書の作成（6月～7月上旬）

各班は、第一ステップとして、班内で解決に挑む社会課題を設定しなければならない。班内でブレインストーミングを繰り返し、1つの社会課題に絞ってもらった。そして、高校生が取り組むうえで妥当性のある解決活動を策定した。その際、担当教員以外にも、活動に関連する外部団体（NPO、社会福祉協議会、企業、地方自治体等）に当たり、策定した活動に関してアドバイスを受けることを強く奨励した。外部団体への渉外を奨励した理由は、自分たちの策定した社会課題と解決のための活動が、独りよがりなものになっていないかチェックし、活動の妥当性を検討する

ためである。教員以外にも、その道の専門家からのアドバイスをいただくことによって、活動の妥当性を高めることができる考えた。

③「社会課題レポート」の提出（7月下旬）

各班は、活動企画書を書く段階で、扱う社会課題が本当に解決に値する課題なのか、書籍、論文、白書、統計等を用いて確認することが求められる。そのことを評価し、且つ参考文献の引用方法やレポートの書き方を練習させるために、今年度は活動企画書とは別に、各生徒が「社会課題レポート」を提出することを義務付けた。文字数は、私立大学のAO入試の課題論文を想定し、3,000字程度とした。

④アクション（解決のための活動）（8月～11月）

各班は、夏休み期間中にアクションすることが求められた。各班の活動テーマと活動内容については、資料の「活動一覧」を参照していただきたい。

なお、夏休みだけでは満足せずに、活動を継続した班が相次いだ。12月末まで活動を継続している班もあり、生徒の意欲の高さを見ることができた。

⑤振り返りと「中間発表」（9月～10月）

2学期は、振り返り活動と中間発表の準備期間とした。各班は、活動紹介ポスターの作成、及び7分間のプレゼンテーションを作成した。10月21日（土）に中間発表会を実施した。なお、中間発表は、2学期の成績に反映されるため、担当教員が評価をつけた。

⑥「最終発表」に向けて（11月～12月初旬）

中間発表後は、振り返り活動と最終発表に向けて準備の時間とした。各班は、担当教員から中間発表に関するフィードバックを受け取り、そのフィードバックに基づき、最終発表を準備した。その中でも、中間発表で優秀な評価を得た3つの班が、11月の「高校生国際ESDシンポジウム」にてポスター発表に臨んだ。また、2つの班が12月2日に開催された「教員免許更新講習」の公開授業にて、活動報告に臨んだ。

なお、最終発表会は12月9日（土）に実施し、3学期の評価の対象とした。ルーブリックは、中間発表と同様のものを使用した。

（3）卒業研究に向けた準備（11月中旬～翌年3月）

①11月中旬：卒業研究への導入

本校における2年次「T-GAP」は、3年次の「卒業研究」への流れの中に位置づけて実施されており、生徒は今後3年次の10月完成を目標に「卒業研究」の執筆を行っていく。「卒業研究」は、個人が興味関心のある分野に対して課題を設定し、研究、制作等を行うものである。

そこで、多くの班の「GAP」活動が終わった11月中旬に、生徒が現在どのようなテーマに興味関心を抱いているのかを確認するため、生物資源・環境科学科目群、工学システム・情報科学科目群、生活・人間科学科目群、人文社会・コミュニケーション科目群ごとに集まり、それぞれが「卒業研究」で扱いたい内容についてのスピーチを行ってもらった。すると、驚いたことに多くの生徒が研究内容についてしっかりと話が出来ていた一方で、「これが研究になるのかが不安」や「この先どのように研究を進めていけば良いか分からない」という悩みを口にする生徒も見られた。このような悩みは、まだ本格的な研究活動を行っていない高校生であれば、誰もが抱くものであると考えた。

②12月中旬：「研究とは何か」概要の説明

上記を受けて、まず研究テーマを設定するための参考として、これまでに書かれた卒業研究を紹介し、「自分の専門分野に関するもの」や「進路との整合性があるもの」などテーマ設定の仕方について説明を行った上で、個人に「仮テーマ提出シート」の執筆を促すこととした。さらに、自分が「やりたいこと」を研究に結び付けるための方法として、「一次調査」を行い、問いのスパイラルを起こすことの重要性を指導した。加えて、田村校長による「研究の進め方」という講話を受け、生徒たちは研究とは何かを学んだ上で、「仮テーマ提出シート」の執筆を行った。

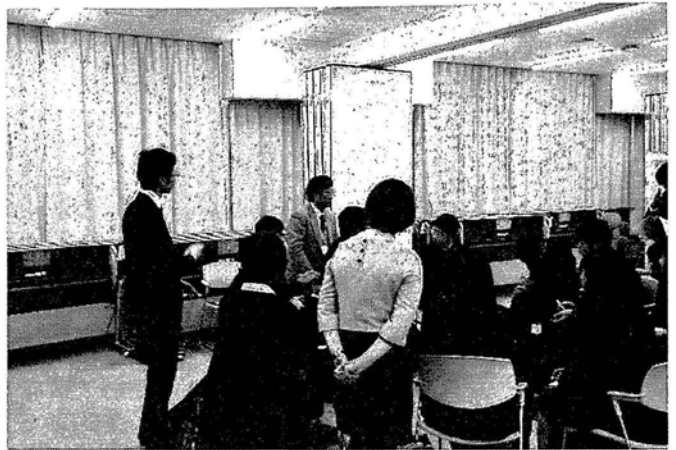
③12月中旬：論文執筆における基本事項の確認

「仮テーマ提出シート」提出後は、論文についての概要を説明し、書く際に必要となる基本的な事項を確認した。一つは、参考文献の表記の仕方である。仮テーマを書かせるにあたり、CiNiiやGoogle Scholarを用いた先行研究の検索方法は既に確認していたため、調査した資料を参考文献として自分の論文に引用するやり方をワークショップ形式で指導した。重ねて論文の参考文献一覧の表記方法も示した。これらは、基本的な事項ではあるものの、調査・研究を始めてしまうと指導が行き届かなくなる部分でもある。そのため、まだ準備を始めたばかりで比較的時間に余裕のあるうちに確認を行った。その後、冬休みにそれぞれが「卒業研究」のテーマにしようと考えている分野の先行研究を調査し、ブックカード形式にまとめるという活動

を行った。

④2月：先行研究レビュー発表会

2018年2月15日の「総合学科学研究大会」の公開授業にて、すべての生徒が「先行研究レビュー」を発表した。研究テーマごとに生徒をグループ化し、一人5分以内で発表した。そして、3月後半に構想発表会を経験し、いよいよ個人研究の完成に向けて、調査及び論文執筆へと進んでいくこととなる。



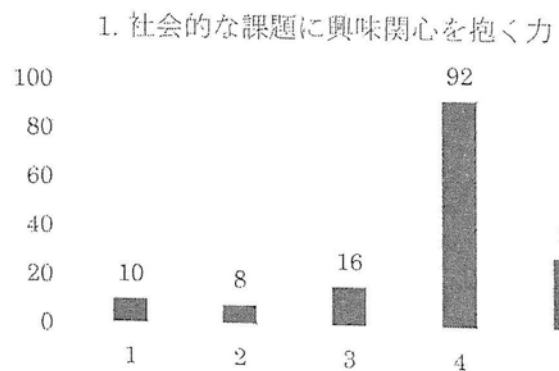
(10人で1グループとなり先行研究について発表した。)

5. 授業の評価と分析

年度末に「T-GAP授業アンケート」を実施した。155名の生徒が回答した。アンケートの内容は以下のとおりである。まず、以下の力が身についたかどうか、5点法で自己評価してもらった。結論から言えば、ソーシャル・アクション型の授業に対する生徒の評価は極めて肯定的であることが分かった。

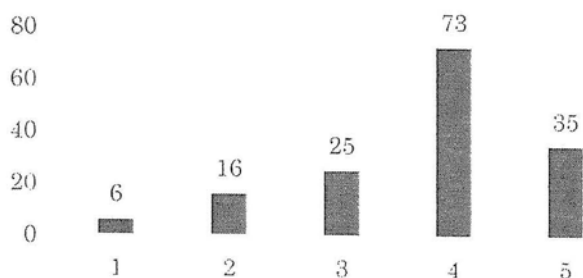
1. 全くそう思わない。
2. あまりそう思わない。
3. どちらとも言えない。
4. そう思う。
5. 強くそう思う。

(1) 社会的な課題に興味関心を抱く力



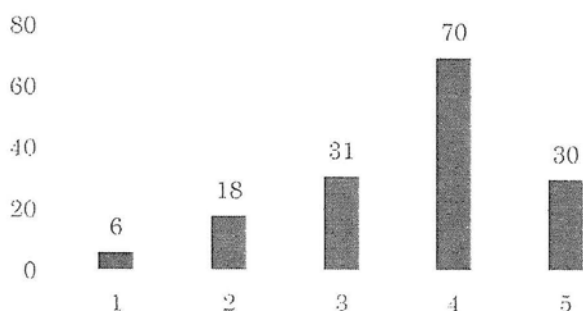
(2) 社会課題についてリサーチしてまとめる力

2. 社会課題についてリサーチしてまとめる力



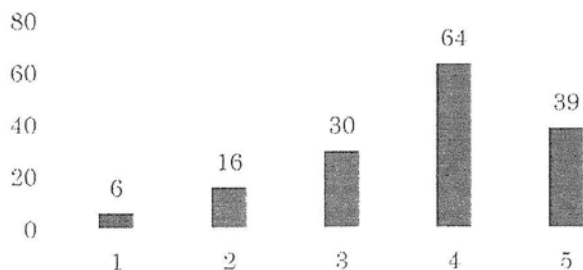
(3) アクションプランを立案する力

3. アクションプランを立案する力



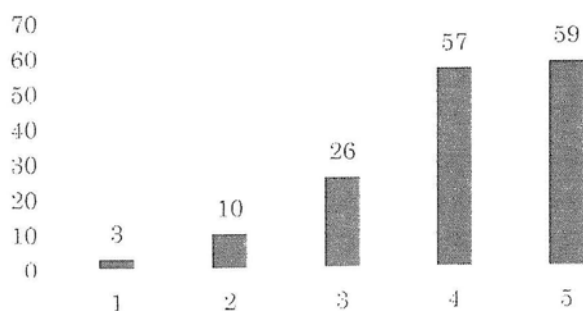
(4) 問題解決に向けてアクションしてみる力

4. 問題解決に向けてアクションしてみる力



(5) 仲間と協力して活動する力

5. 仲間と協力して活動する力

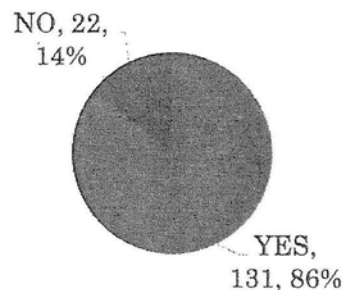


どの力に対しても、生徒の自己評価は肯定的である。特に、「仲間と協力して活動する力」は、115名の生徒がそう思う、または強くそう思うと回答している。

また、「ほかにGAP活動を通じて身についたと思う力がありますか?」という自由記述の質問に対して、15名の生徒が「プレゼン力」を挙げた。課題について調べ、その結果をまとめて発表する力は、課題研究活動を遂行する上で重要なスキルである。今年度の授業では、中間発表及び最終発表を重視した結果、生徒は一定の課題研究汎用スキルを身につけることができたと言える。

(6) 「T-GAP」のように、アクションに取り組む授業は必要だと思いますか?

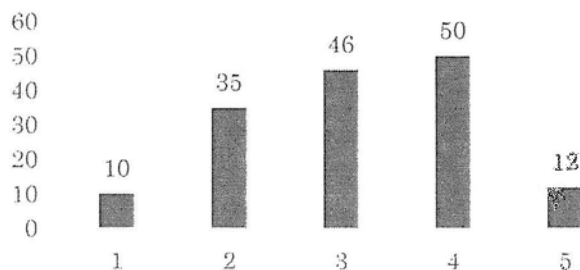
「T-GAP」のように、アクションに取り組む授業は必要だと思いますか?



また、ソーシャル・アクションに取り組むこと自体について、生徒は極めて肯定的に評価している。おそらく、1年次より体験・経験を重視する授業を数多く受けているため、アクションする授業に対して抵抗感がなかったことが要因かと思われる。

(8) 高校生は社会課題を解決することができますか?

8. 高校生は「社会課題」を解決することができますか?

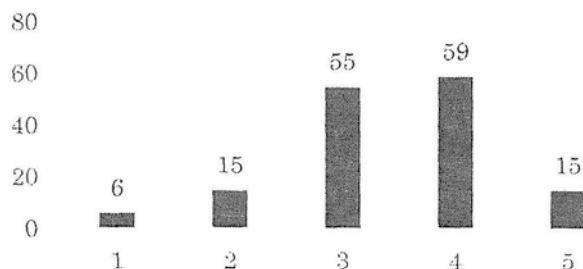


肯定的な意見が多い一方で、「あまり思わない」及び「全く思わない」と回答した生徒が45名に達した。その理由として、「社会課題」を大きく捉えていることが挙げら

れる。自由記述を分析すると、「身の回りのこと」を社会課題として認識している生徒は、肯定的に回答している。その一方で、「社会課題」を大きく捉えている生徒は、否定的に回答している傾向が読み取れるのである。本校は、1年次の「グローバル・ライフ」にて、身近なことからグローバルな課題へと接近するアプローチをとっている。さらに、「T-GAP」の冒頭においても、大きな課題を身の回りの問題と関連させてブレークダウンするよう指導してきた。しかしながら、生徒のマインドとして、「社会課題」の規模を小さく捉えることに困難を感じていたと推察される。

(9) あなたは、将来にわたり社会課題の解決に携わりたいと思いますか？

9. あなたは、将来にわたり社会課題の解決に携わりたいと思いますか？



(9) の結果より、全体のうち 49% の生徒が、将来にわたって社会課題の解決に携わることを希望している。一方で、「全くそう思わない」及び「あまりそう思わない」と回答した生徒は、14% に留まっている。つまり、全体的な傾向としては、社会課題に携わる意思がある、または意識が高いと言えるのではないだろう。

つまり、社会課題の解決に携わりたい若者が多い一方で、どうすれば解決活動に参加できるのか、分からない若者も多いと思われる。したがって、若者の高い社会貢献度をカタチにするためにも、ソーシャル・アクションに取り組むための授業開発は必要だと思われるのである。

6. 結語

今年度の「T-GAP」では、「半径 1 メートルの社会課題」に目を向けるように繰り返し指導してきた。すなわち、日常生活から解決すべき課題を設定することの大切さを強調してきたのである。その背景を、1 年次「グローバル・ライフ」に求めることができる。「グローバル・ライフ」では、日常生活がいかに関係する課題を密接に関わっているか、トピック学習に取り組んでいる。そして、日常生活から課題を設定する練習を積んだ後、解決活動に取り組

む授業として「T-GAP」が準備されているのである。

その意味で、本校のカリキュラム開発上、「T-GAP」は要となる科目である。なぜなら、課題設定と「卒業研究」を結びつける连接的科目であり、且つ SGH が掲げる育成したい資質・能力・スキルを網羅的に扱う授業だからである。

今年度は、SGH 指定 4 年目であり、開発に関する知見はだいぶ蓄積することができたと考えている。一方で、その成果をいかに評価していくか、つまり評価指標とフィードバック体制の開発まではたどり着いていない。来年度は、SGH 最終年度であるため、ソーシャル・アクション型授業の「指導・評価・フィードバック」一体型の研究開発が大いに求められる。

T-GAP Assessment Rubric (Criteria Sheet) 教師用

評価項目/評価点	7	4	1
記述内容・考察	自分たちの考察を十分にに入れて、かつ課題に対する内容も的確に書かれている	ある程度自分たちの考察を入れて、かつ課題に対する内容も書かれている	考察がないが、ある程度、課題に対する内容が書かれている
評価項目/評価点	5	3	1
構成	4つの項目(調査内容・質問・まとめ及び考察・所感)が入られ、1000字以上1200字以内にとまとめられている	4つの項目(調査内容・質問・まとめ及び考察・所感の中で)が入られ、800字以上1000字以内にとまとめられている	3つの項目(調査内容・質問・まとめ及び考察・所感の中で)が入られ、約800字以下にとまとめられている
インタビュー結果	2つ以上の項目についてインタビューし、その結果をうまく取り入れている	1つの項目についてインタビューし、その結果をうまく取り入れている	1つの項目についてインタビューし、その結果を取り入れている
調査結果	全体に渡り、かなり深い内容を調査しまとめられている	部分的に深い内容を調査しまとめられている	ある程度の内容を調査しまとめられている
全体的なまとめ 論理的構成	全体的に、また理論的構成でも、よくまとまっている	全体的に、また理論的構成でも、ある程度まとまっている	かなり部分的に独立した構成になっている

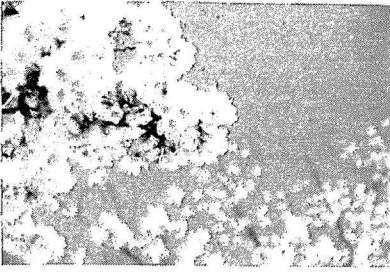
2年 組 番 名前: 27

T-GAP Assessment Rubric (Criteria Sheet) 教師用

評価項目 / 評価点	7	4	1
調査 (参考文献使用)	全体に渡り、かなり深い内容について(複数 の信頼性が高い) 参考文献を使い調査しま とめている。	内容について部分的に(1 つぐらい信頼性 が高い) 参考文献を使い調査しまとめてい る。	ある程度の内容について参考文献を使い調 査しまとめている。しかし、信頼性がある文 献使用は見られない。
評価項目 / 評価点	3	2	1
構成	4つの項目(社会課題・調査内容・解決策・ 考察・所感)が入れられ、2700字以上3 000字以内にとまっている。	4つの項目(社会課題・調査内容・解決策・ 考察・所感)のいずれかが部分的に少なく、 もしくは抜けていて、2200字以上27 00字未満にとまっている。	3つの項目(社会課題・調査内容・解決策・ 考察・所感)のいずれかが部分的に少なく、 もしくは抜けていて、2000字以上22 00字未満にとまっている。
活動	調査で見出した社会課題に十分合致した活 動内容である。	調査で見出した社会課題に合致した活動内 容である。	調査で見出した社会課題にある程度合致し た活動内容である。
全体的なまとめ 論理的構成	全体的に、また理論的構成でも、よくまとま っている	全体的に、また理論的構成でも、ある程度ま とまっている	かなり部分的に独立した構成になっている

2年 組 番 名前: _____

16



T-GAP 春の陣

—キミとボクのはじめての協働作業—

●映画「僕たちは世界を変えることができない」

2005年8月、医大に通う大学2年生のコータは、友人の芝山や矢野とそれなりに楽しい日常を過ごしていたが、何か物足りなく感じていた。ありきたりの毎日を変える何かがないだろうか…？ そんなことを頭の隅で考えていたある日、ふと立ち寄った郵便局で海外支援案内のパンフレットに目とまる。

「あなたの150万円の寄付で、カンボジアに屋根のある学校が建ちます！」そのパンフレットを手にとった瞬間、コータの明日は変わった——。コータはすぐに知り合い全員にメールで「カンボジアに小学校を建てよう！」と送信。大半の友達がイタズラや無理だと相手にしない中、芝山や矢野に加え、合コンで知り合った本田が仲間に加わってくれた。夜のクラブでのナンパ、学校でのピラ配りなどで人集めに奔走してチャリティーイベントを何とか成功させた4人だったが、単なるお金集めだけでは意味がないと、今度は現地でリサーチをするためにカンボジアヘスタディー・ツアーを敢行する。しかし、到着したのは東南アジアの最貧国。そこには、コータたちが想像している以上の現実が横たわっていた。地雷の残る村で生活しなければならない人たち、HIV感染者の現実、そして学校に行けない子どもたち。

現実を目の当たりにし、うなだれて帰国したコータたち。果たして、コータたちは目標額を集めることができるのか？ そして、カンボジアの子どもたちのために学校を建てることができるのだろうか？

「この問題を解決したい」というパッションが、世界を少しずつ変えていく

●キミの問題意識は何ですか？

- ・若葉駅から学校までの道ばたに、どれだけゴミが落ちているのか？
- ・急速に高齢化が進む日本。高齢者福祉の現場では、どんな問題が起きているのか？
- ・レジーナ先生は、あまり日本語ができないけれど、日本での生活に不自由はないのだろうか？
- ・筑坂は、外国人の訪問客にとって「いい環境」なのだろうか？

世の中には、解決すべき「社会課題」がたくさん存在する。それらの問題を解決するために、政府、NPO、企業等ががんばっているが、まだまだ未解決な問題が多い。君たちは、一年次の「産社」「キャリア」「グローバルライフ」等の授業を通じて、社会課題について学習してきた。今年は、身の回りの社会課題の解決に向けてアクションする年だ。キミが課題だと思うことは何だろうか？

●「知ること・理解すること」、そして「アクション」へ

「あれが問題だ」「これが課題だ」と口で言う人はいるけれど、解決に向けて実際に動いている人はどれぐらいいるだろうか？ 「T-GAP」が目指すのは、**アクション！** キミの思いをカタチにするための授業だ。

T-GAP 僕らの夏休みプロジェクト

企画名	
プロジェクトリーダー 組 番 名前	
プロジェクトメンバー	
組 番 名前	組 番 名前
組 番 名前	組 番 名前
組 番 名前	組 番 名前
活動目的（問題意識、企画立案の背景、最終的な目標など）	
活動計画（活動時期等）	
備考	

担当教員、副担当教員の審査は、プロジェクトメンバーが依頼すること。学年主任印は、担当教員が年次会議に提出。

【資料5】活動概要一覧及び担当教員によるコメント

A1	障がいをもった子ども達の児童施設の利用
A2	地域福祉の現状～新たなる支え合いを求めて～
A3	福祉の工夫を知ろう～今日から始められる障がい者サポート
A4	愛のfukushīフレフレハ接したい（隊）ー
A5	慈善活動の・・・
A6	今、最も高齢者に本当に必要なものとは
A7	児童教育の課題とその改善案～そして、私たちがこれからすべきこと
A8	孤児～孤独な子供～
A9	これからの社会福祉を担っていく学生のあり方
B1	保育園と幼稚園の教育の違いによる課題
B2	地域コミュニティの輪を広げよう
B3	小学生のゲーム依存を軽減させる
B4	食育に関するワークショップ
B5	SAP：save animal project
B6	児童センターお助け隊
B7	Let's study project!!
B8	地産地消：地元の野菜を食べよう
B9	Study Support
B10	子供の運動能力低下を改善するには
C1	福島が私たちにもたらしたこと
C2	「福島」 ～ 帰還問題と私たち～
C3	風評被害の与える影響とその改善策
C4	富岡町の現状を知る
C5	福島県の観光業の課題と現状
D1	パーム油の認知度を上げるには
D2	つるがしマルシェ
D3	日本語ボランティア
D4	食べ物×ムスリム＝共生
D5	防災倉庫改良プログラム
D6	ファストファッション：中学生とともに学び国際協力へ
D7	イスラームマニュアル in TSUKUSAKA

A グループ 1 班

「企画名：障がいをもった子ども達の児童施設の利用」

【活動概要】

この班は「子ども」をキーワードに、児童センターと、障がい児施設に分かれて、ボランティア活動を行った。その後、それぞれの体験で得た情報や感想を伝え合い、子どもに関わる現状について調査した。その結果、健常な子ども達は障がいを持つ子ども達に対して偏見も差別も抱いていないことを発見し、小さい頃から自然に交流させることがノーマライゼーションを実現する有効な手段だという結論に達した。そこで、障がいを持つ子ども達が通常の児童

施設を利用しやすくなる方策をグループで検討した。

【協力団体】

坂戸市役所 大家児童センター、
社会福祉法人ハッピーネット 第2川越ゆめの園

【担当者より】

まだ純粋な子どものうちから健常児と障がい児の交流活動を始めることの重要性に気づいた点は賞賛に値する。交流活動を推進するための方策について、メンバー全員で真剣に議論する姿に頼もしさを感じた。

(加藤敦子)

A グループ 2 班

「企画名：坂戸の地域福祉の現状」

【活動概要】

この班は福祉施設と地域住民との関わりが希薄なことを社会的課題として捉え、施設利用者と地域住民を繋ぐイベントにボランティア要員として参加することによって、地域と施設が支え合っていく方法を探った。参加したイベントは、児童センターのストーンアート作り、介護老人施設のレクリエーション活動、障がい者施設のクッキー作り、幼稚園のキャンドルナイトである。その結果、各施設がイベントを増やし、地域住民も積極的に参加することによって、お互いに支え合えるのではないかと結論づけた。

【協力団体】

坂戸市立坂戸児童センター
社会医療法人社団 新都市医療研究会〔関越〕会 介護老人保健施設すみよし
NPO 法人ぼてと to 地域福祉の会 ぼてと工房
学校法人横瀬学園かみひろや幼稚園

【担当者より】

福祉を学んでいる班員が多く、全員が2箇所以上のイベントに参加し、意欲的に取り組んでいた。児童、要介護老人、障がい者、幼児を対象としたイベントはバラエティに富んでおり、施設と地域の支え合いの可能性を多角的に考えることができた。

(加藤敦子)

A グループ 3 班

「企画名：福祉の工夫を知ろう～今日から始められる障がい者サポート～」

【活動概要】

この班は社会全体に福祉への意識が不足していることを社会課題として捉え、自分たちが率先して福祉について学び、現場で見てきたことを発信することによって、福祉への意識を高めてもらい、問題解決に貢献しようと考えた。知的障がい児や知的障がい者の施設、老人ホーム、小学生の夏休み自由研究教室のボランティアとして活動し、現場が工夫している点を観察した。その上で、自分たちにできることを考えた結果、今一番大切なことは高校生として日々の学習に真剣に取り組むことであると結論づけた。さらに、福祉を向上させるために、今学びたいことを4つの専門分野の視点に立ってまとめた。

【協力団体】

社会福祉法人ハッピーネット 第2川越ゆめの園
社会福祉法人ハッピーネット 鶴ヶ島ゆめの園
特別養護老人ホーム シャロームガーデン坂戸
坂戸市社会福祉協議会 NPO 法人環境サポート埼玉 さかど水辺環境教室

【担当者より】

各自の体験と調査結果を持ち寄り、グループで熱心に討論していたのが印象的なグループである。始めはボランテ

ィア活動を単発で行うだけでは何の問題解決にもならないと否定的な意見も出されたが、やがて、学生の本分である勉学にいそしむことが将来の問題解決に繋がるとの結論に達し、農業・環境、工業・情報、福祉・家政、人文・ビジネスを学ぶ本校の生徒がそれぞれの専門分野の視点をもって福祉に関する知識や技術を身に付けてほしいと訴えた点は賞賛に値する。

(加藤敦子)

A グループ 4 班

「企画名：愛の Fukushima～ワレワレハ接したい[隊]」

【活動概要】

この班はボランティア活動への参加を阻害しているのは接し方に関する知識の欠如であると考え、この問題を解決するために接し方を学び、その情報を発信することをゴールとした。班員は高齢者、子ども、障がい者の施設に分かれてボランティア活動を行い、それぞれの立場で接し方の注意点をまとめた。また、高齢者や子どもや障がい者が抱える問題について調査し、その過程で「ヘルプマーク」の存在を知った。その裏に必要とする助け方が書いてあることを伝え、相手の立場に立って接していくことの大切さを訴えた。

【協力団体】

社会福祉法人ハッピーネット 第2川越ゆめの園
特別養護老人ホーム シャロームガーデン坂戸
坂戸市立勝呂福祉作業所

【担当者より】

各自の体験を丁寧に振り返り、高齢者や子どもや障がい者と接するときの注意点を誠実にまとめ上げた。タイトルにも表れているように、助けを必要とする人に積極的に関わろうとする高校生らしい素直な姿勢に好感が持てた。

(加藤敦子)

A グループ 5 班

「企画名：慈善活動を通じての高齢者と障がい者の社会課題」

【活動概要】

この班は少子高齢化が進み支援が必要な人が増加する社会の中で、自分たちに何ができるかを考えようとした。班員は老人ホームと障がい者の施設に分かれてボランティア活動を経験し、その後で、高齢者や障がい者を取り巻く状況について調査した。その結果、どんな年齢層でも福祉施設を敬遠せずに、積極的にボランティア活動することが大切であると結論づけた。

【協力団体】

特別養護老人ホーム 蔵の町・川越
特別養護老人ホーム シャロームガーデン坂戸
社会福祉法人ハッピーネット 鶴ヶ島ゆめの園
坂戸市勝呂福祉作業所

【担当者より】

戸惑いながらも、実際にボランティア活動を経験してみると、高校生のボランティアを歓迎する声が利用者からも職員からも多く聞かれ、やりがいを感じたようである。今後の積極的な社会参加に期待する。

(加藤敦子)

A グループ 6 班

「企画名：今、高齢者に最も必要なこと」

【活動概要】

高齢者に関する問題という介護者不足や介護者の低賃金等、介護従事者側の問題に目を向けがちであるが、この班は高齢者がこれからの人生を充実させるためのサポートを探るという観点をもって活動した。まず、老人ホームで

ボランティア活動をし、アンケート調査を実施した。その結果、多くの高齢者が求めているものは、予想に反して、スマートフォンや、その使い方講習会であった。つまり、高齢者が最も必要としているのは家族や知人達との繋がりであることが判明した。

【協力団体】

一般社団法人木もれび ディサービス第2木もれび
高島平団地フリーマーケット
居宅介護支援事業所 鳩山

【担当者より】

この班で特筆すべきことは約50名の高齢者の方にアンケート調査を行ったことである。高齢者が求めるものとして、当初予想していた話し相手やレクリエーションという回答は少なく、スマートフォンの講習会が最も多かったことに班員は驚いていた。同時に、見えなかったものが見えるようになる研究のおもしろさを知ったことは大きな収穫であった。

(金城幸廣)

A グループ 7班

「企画名：児童教育の課題とその改善案～そして私たちがこれからすべきこと～」

【活動概要】

この班は「児童福祉」をテーマに、児童センターや保育園等でボランティア活動を行い、子ども達の現状と児童教育の実情について調査した。実際に行った活動は子ども祭りの運営補助や子どもと行う環境調査等である。その結果、SNSの普及により児童を取り巻く環境が激変していること、保育士不足が深刻であること等に行き着いた。そこで、外遊びの奨励、コミュニティの強化、保育士確保が必要であると結論づけた。

【協力団体】

坂戸市立坂戸児童センター
坂戸市社会福祉協議会 NPO 法人環境サポート埼玉 さかど水辺環境教室
社会福祉法人川越福祉会 増美保育園

【担当者より】

この班は事前リサーチとして2020年に改訂される学習指導要領について調査している。その上で、SNSの普及による社会の変化等、社会全体に目を向けて調査したことは評価に値する。

(金城幸廣)

A グループ 8班

「企画名：孤児～孤独な子供～」

【活動概要】

この班はユニセフのアンケートが示している日本の子どもは3人に1人の割合で孤独を感じているという結果に着目し、子どもの孤独を解消するための方法を検討した。児童センターの工作教室や子ども祭り、子ども食堂のボランティアとして活動し、孤独を感じがちな現代の子ども達にボランティアとして積極的に関わっていくことが大切であるとの結論に達した。

【協力団体】

坂戸市立坂戸児童センター
一般社団法人シンビオージ 子ども食堂

【担当者より】

「自分は孤独だ」と感じる子どもの割合を調査したユニセフの国際比較に基づき、「子ども」をキーワードにボランティア活動を選定した。国際的な規模で実施したアンケートを活用することは、グローバルな視点を持つという意味で有意義なことである。その上で、地元の児童施設のボランティア活動への積極的な参加を奨励したことは評価で

きる。

(金城幸廣)

A グループ 9 班

「企画名：これからのボランティアを担っていく若者たち」

【活動概要】

この班はボランティア要員の高齢化に着目し、高校生のボランティア離れを社会課題として設定した。高齢者施設や障がい者施設、水辺教室でボランティア活動を行い、ボランティアとして参加していた方々にインタビュー調査を行った。その結果、ボランティア活動に意欲を持ったのはある程度の年齢になってからとの意見が多く寄せられたが、若い世代からの継続したボランティア参加が重要であると主張した。

【協力団体】

特別養護老人ホーム シャロームガーデン坂戸

NPO 法人いきいき市民連絡会 にぎやか

社会福祉法人ハッピーネット 鶴ヶ島ゆめの園

特別養護老人ホーム すみれの里・川越

坂戸市社会福祉協議会 NPO 法人環境サポート埼玉 さかど水辺環境教室

和光自然環境を守る会

【担当者より】

この班の班員の中には数年に渡って継続的に、自然環境を守る会に関わっている生徒がいる。多くの場合、ボランティア活動は単発に終わることが多いが、継続的に活動していることは評価に値する。今後はその輪を広げていくことを期待する。

(金城幸廣)

B グループ 1 班

「企画名：保育園と幼稚園の違い」

【活動概要】

この班は社会問題として、今マスコミ等でも取り上げられる機会の多い保育園の待機児童問題、保育士資格を持ちながら実際保育士として働かない「潜在保育士」の増加問題をあげた。保育園と幼稚園の教育の違いがその後の教育にどのような差異が生じるのかを考え、実際に市内の幼稚園・保育園双方にボランティアとして参加し、双方の教育現場を体感した。

【協力団体】

鶴ヶ島市社会福祉協議会

社会福祉法人はちの巣会 はちの巣保育園

学校法人横瀬学園 かみひろや幼稚園

【担当者より】

夏休み期間中、保育園でのべ6日間、幼稚園でのべ4日間、お世話になったということである。まずは下準備の交渉から実際の活動まで生徒自身が自主的によく動くことができたことに感心する。園児主体の活動に寄り添う保育士さんたちの姿や、英語学習まで行う幼稚園での様子を生徒達は驚きをもって見てきたようである。幼少期の教育の違いが今後どのような差異となるかの考察は今後の生徒達の研究に期待したい。

(中井毅)

B グループ 2 班

「企画名：地域コミュニティの輪を広げよう！ 地域交流スポーツ大会を通して」

【活動概要】

この班は、近年地域住民のコミュニティが衰退し、近隣同士でさえ交流が減っていることが社会課題とした。東日本大震災時の住民同士の助け合いで、緊急事態に対応した経験を鑑み、今後も地域交流の醸成は大切であると考えた。地域の NPO 法人「well 坂戸」様と協力し、地域交流スポーツ大会を運営し開催した。

【協力団体】

NPO 法人 well 坂戸

【担当者より】

8 月 25 日に、坂戸市民総合運動公園の体育館を借りて、地域交流スポーツ大会を開催した。市内の小学生 20 名以上が集まり、体を使ったゲームで大いに盛り上がった。「はじめは小さな交流でも、持続することでより深い交流が出来るのでは。」「若い世代が積極的に地域交流をしていけば、地域交流が当たり前になるのでは。」イベント開催後の生徒達の思いには、頼もしさを感じる。

(中井毅)

B グループ 3 班

「企画名：小学生の健やかな成長を支える」

【活動概要】

この班は、スマートフォンやゲーム機の普及などにより、小学生の外遊びの減少していることが様々なリスクを引き起こしていると考えた。そこで、下交渉をした上で近隣の小学校で、ゲームで遊ぶ時間、就寝時間等のアンケート調査を行った。その上で夏休み期間中の一週間にわたり、坂戸児童センターでボランティア活動を行った。

【協力団体】

坂戸市立児童センター

【担当者より】

児童センターでは、子どもたちと遊ぶだけでなく、イベントの手伝いや清掃・安全管理など裏方の仕事も任され、職員の皆様にも大変評価して頂いたようである。「1 日あたりのゲーム時間が 1 時間以下の児童は全体の 80%」、「ほとんどの児童が 9 時台には就寝する」など、アンケート結果は生徒達の予想を良い意味で裏切った。今後とも「自分たちの考え」と「実際の事象」のギャップをよく検討し、より説得力のある研究に進んでもらえることを期待する。

(中井毅)

B グループ 4 班

「企画名：もぐもぐ調査隊（食育ワークショップ）」

【活動概要】

ダイエットのために回転寿司で「シャリを残す」女性。朝食を食べない子どもたち……。報道等に見られる「食に対する意識の低下」をこの班は社会課題とした。インタビュー調査などを実施した後、8 月 19 日、本校にて「食のあり方」に関するワークショップを開催した。その内容は本校農場の見学会・飼育動物とのふれあい、食に関する講義が含まれる。

【協力団体】

こみゆにていぶらざ八潮@品川

ルピナス（パン製造販売業）

【担当者より】

講義内容は食品ロスや地産地消、孤食・行事食と行った多岐にわたるもので、「UFOズッキーニ」などの珍しい野菜を紹介するなど、受講者の興味を引く工夫が随所にされたものであった。受講者アンケートから実際に野菜や動物にふれ合う体験学習のインパクトが大きいと感じたようである。次回のワークショップも計画されている。また班員の中には直接大学教授に教えを請う者までおり今後の進展も楽しみである。

(中井毅)

B グループ 5 班

「企画名：SAP ～save animal project～」

【活動概要】

現在保健所が行っている動物保護に関する取り組み、動物保護の現状についてインタビューなどを行った。またシェルターボランティアに参加し、清掃活動、譲渡現場の立ち会いなどからシェルターの問題点などを確認することができた。今後もシェルターボランティアに参加し活動する予定である。

【協力団体】

・NPO 法人 ペット里親会ふじみ野シェルター

【担当者より】

この班は、人間の勝手に奪われている動物達の命があると知り、それらを少しでも減らしたいと考えこの活動を始めた。保健所に行き動物保護の現状を知り、実際にシェルターボランティアに参加し活動したことから保健所やシェルターの問題点などを知ることができた。問題点の一つとしてはシェルターボランティアに参加している人が少ないことである。班員達は今後もシェルターボランティアを続けながらボランティアに参加してくれる人を募集している。

(市川友紀也)

B グループ 6 班

「企画名：児童センターお助け隊」

【活動概要】

現在の日本では共働きの家庭が増加したことにより様々な問題が発生し、その影響を大きく受けるのは子供達である。そこで坂戸市立児童センターの協力のもと職員の方が多く必要となる児童センターの行事にボランティアとして参加し子供達がより安全に楽しめるように活動した。

【協力団体】

・坂戸市立児童センター

【担当者より】

この班は、坂戸市立児童センターの長期休暇ならではの行事の中で、普段よりも多く来る子供達がより安全に行事を楽しむために活動を始めた。班員ひとり一人は各々の行事ボランティア活動の参加し、活動した。その中にはお化け屋敷ボランティアというものがあり二日にわたり準備をするようなボランティアなどもあった。子供達にとって児童センターの行事において高校生と触れ合う機会はとても貴重な体験であったと思う。

(市川友紀也)

B グループ 7 班

「企画名：Let's study project!!」

【活動概要】

現在の日本では経済的に苦しい家庭や一人親家庭、児童保護施設や被災地などで暮らし進学をあきらめる子供が多くいる。その中で学力支援を行っている NPO 法人キッズドアと共に活動し、栄養教室やおにぎり作り、餃子作りを通して子供達に夢と希望を持てる社会の実現をお手伝いする。

【協力団体】

・NPO 法人キッズドア

【担当者より】

この班は、貧困などの様々な困難があり、高校や大学に進学することをあきらめる子供が多くいる現状について考え活動した。NPO 法人キッズドアの本部にてボランティア活動を行ううえでの心構えや対応、接し方、ルールなどの説明を受けボランティア活動に望んだ。子供達と一緒にご飯を作り、国語の勉強を教え、一緒に遊ぶことで夢と希望を持てる社会の実現に貢献できたのではないかとと思われる。

(市川友紀也)

B グループ 8 班

「企画名：地産地消 地元の野菜を食べよう」

【活動概要】

居住地域にも直売所やスーパーの地産地消エリアを見かけるが、比較的購入者が少ないことに疑問を持った。その理由をインタビューを通して多角的に調べ、購入者増加につながる取り組みを考えていった。また県内の JA での販売体験や自然農法農家での作業体験を通して、販売者・生産者の視点も調べてみた。

【協力団体】

- ・JA いるま野 坂戸農産物直売所
- ・陽子ファーム 所沢市

【担当者より】

インタビュー結果により、次のような厳しい現実直面することになった。量産ができる大きい農家さんと地元の小さい農家さんの価格競争の厳しい現実。傷ついた農産物を嫌う傾向がある多くの消費者。直売所の知名度等であった。そんな中で、スーパーに地産地消の野菜を使ったレシピを置いてもらえるように働きかけた。現時点では思ったような答えは頂けず、今後も働きかけていく予定だ。

(藤野昌哉)

B グループ 9 班

「企画名：Study Support」

【活動概要】

貧困が社会問題の一つになっている。子供からの貧困の連鎖を断ち切るために教育が一つになることを知り、このグループは、経済的に苦勞されている家庭の子供達に対して学業援助活動を行っている学生講師インカレサークル『ステップアップルズ』に協力を求め、小学 2~6 年生と中学 2 年生に対して各種サポート活動を行った。

【協力団体】

- ・学生講師インカレサークル『ステップアップ塾』

【担当者より】

主な活動内容は直接、生徒たちに学習指導をしたことと補助的業務等。この補助業務をすることにより、学生の先生たちが教えることに専念できたので、同時に行っていた。また、サポート最終日に行ったアンケート調査によると、このグループの活動は、生徒、先生方からも非常に好評で、高く評価された。グループメンバーの何人かは今後もサポートを続けていく予定。

(藤野昌哉)

B グループ 10 班

「企画名：子供の運動能力低下を改善するには」

【活動概要】

子供達の運動能力が顕著に低下していると最近ではよく言われている。その現状を調べ、それがどんな影響を及ぼしているかについて調べた。運動、主に遊びが子供達の発育、健康維持能力、またコミュニケーションの発達にまで影響していることが分かった。メンバー達が活動した埼玉県内の 4 つの保育園では、それぞれ考えた遊びを提案し実際に実施して、園児たちの活動についても観察した。

【協力団体】

- ・埼玉県内の 4 つの保育園（匿名希望）

【担当者より】

それぞれの保育園で、遊びに対する観察、また提案・実施をおこない、それに取り巻く社会問題も理解したようだ。少子化で兄弟姉妹が少ない家庭が多い中、また限られた活動時間内で、このような大きなテーマを課題にしたこのグループは、できることは最大限行ってきた。更に運動の力の向上に向ける具体的な改善策が見いだせると、もっと良

くなるだろう。

(藤野昌哉)

C グループ

「企画名：福島スタディーズ」

※C グループは全体での活動を行いつつ、各班に分かれてそれぞれが社会的な課題として特に注視するテーマを決め、個別に調査を行った。

個別のテーマは、「福島が私たちにもたらしたこと」「『福島』～帰還問題と私たち～」「風評被害の与える影響とその改善策」「富岡町の現状を知る」「福島県の観光業の課題と現状」

【活動概要】

震災から6年過ぎたことや対象生徒たちが当時10歳程度であったことから、まずは過去をひも解く調査活動から始めた。フィールドを福島県いわき市に限定し、官公庁が発表している震災時や放射線量などの情報、新聞・TVなどのニュースなど担当して調査を行った。合わせて、現在までの「放射能」にかかわる実害から風評被害まで様々な議論がなされていることも理解させた。その中で、防災安全について考えると同時に、コミュニティや地域へのかかわり方などを間接的に学ぶことができた。多くの生徒が、将来東京近郊で災害が起きたときに自分たちはどうすべきかということに関心を持ったこともまた成果である。

次のフェーズとして、具体的にいわき市内の個人や団体に調査対象を、農業、漁業、教育・福祉、観光、商業など総合学科ならではの視点を持ちつつ、絞り込み、調査した。調査したことは、全体場で共有し、いわきへの調査ツアーを行う際のしおりにまとめた。初期調査に比べると、この調査は、生徒ひとりひとりの興味や授業内容にリンクしやすく、調査内容に実体性や実感が加わった。

同時に、クラウドファンディングに興味を持った生徒たちは、クラウドファンディングチームを作り、株式会社CAMPFIREが運営するクラウドファンディングサイト「CAMPFIRE」にて資金調達を始めた。生徒たちは、資金集め以上に、宣伝・告知する機能としてクラウドファンディングに目を付けていたため、並行してYoutubeへの動画アップロード、SNSを利用した情報拡散、坂戸市内の商店へのポスター貼付の依頼、東武東上線沿線のターミナル駅でのチラシ配りなど精力的に活動し、自分たちの活動を発信し続けた。これらの活動により、東京新聞、いわき民報、日本経済新聞の取材を受けた。

夏休み中に坂戸市内で、以前から本校と連携する「郡山の子どもたちと遊ぶ会」の協力のもと子ども支援ボランティアを行った。川遊びをしたり、プールで遊んだり、バーベキューをしたりして、郡山の小学生たちとの交流を図った。その後、いわき市への調査ツアーを実施。

〔見学先〕 檜葉町のJヴィレッジ、檜葉町役場、檜葉町仮設商業共同店舗 ここなら商店街、天神岬、富岡町、国道6号線、いわき市内応急仮設住宅、檜葉町からの避難者の方が経営するベーカリーハウス「アルジャーノン」、アクアマリンふくしま、いわき・ら・ら・ミュウ、ワンダーファーム

これらの調査報告を外部に広く行いたいと考えて、文化祭で報告会を朝日新聞ASA坂戸中央協力のもと、実施。いわき・ら・ら・ミュウで展示されていた避難所の段ボールで間仕切りされた部屋などを復元し、展示した。

【担当者より】

生徒たちが震災後の福島を見つめることで、そこに前景化されてきた知的活動を通して蓄積され精査されてきた多様な思考の在り方を学び、その枠組みに触れることで、問題発見・解決の手法や主体的に考える力を身に付けるために有効であったと考える。彼らには、将来自分自身がかかわるであろう地域コミュニティにおいて、この学びを十分に生かしてほしい。また担当教員としては教科を横断したT-GAPという場で、生徒たちが総合学科生らしい〈実社会〉の探求を行えたことは、新学習指導要領を視座としたとき、教員としてもとても実験的・魅力的であった。

(栗飯原匡伸)

D グループ 1 班

「企画名：パーム油の認知度を上げるためには」

【活動概要】

パーム油をご存じだろうか？ チョコレート、洗剤、シャンプー、お菓子など、日常生活において毎日使用するものに使われている油である。とても便利な油であるが、その陰でさまざまな問題を引き起こしている。例えば、プランテーションを造成するために熱帯雨林が伐採され、貴重な動植物が絶滅の危機に瀕している。そのため、このグループは、パーム油とその問題点を広く市民に知ってもらうことが大切だと考え、認知度を向上させるための活動に取り組んだ。具体的には、本校学校説明会にてパーム油を紹介する模擬授業を実践した。また、WWF ジャパンの実施する勉強会にボランティアとして参加し、普及活動に携わった。

【協力団体】

公益財団法人世界自然保護基金ジャパン (WWF ジャパン)

【担当者より】

一年次必修科目「グローバル・ライフ」で、パーム油の問題点について授業した。その内容を活用して、具体的な活動を策定した点が評価できる。また、活動の妥当性を判断するために、WWF にアポを取り、インタビューしたことも評価できるだろう。しかしながら、活動の回数がやや少なかったことが悔やまれるが、新聞への投書など、普及のための活動に継続的に取り組んでいる。

(吉田賢一)

D グループ 2 & 3 班

「企画名：日本語教育と多文化共生社会」

【活動概要】

本校は、SGH に指定されて以来、外国にオリジンをもつ生徒を積極的に受け入れてきた。また、坂戸市に目を転じると、外国人労働者が増加傾向にある。この班は、地域の外国人との共生を課題として設定した。そして、具体的な解決活動として、地域の日本語教室にてボランティア活動に取り組んだ。また、坂戸・鶴ヶ島近辺の外国人が集う祭りである「つるがしマルシェ」の企画・立案に携わり、主催者の城西大学勝浦ゼミナールの皆さんとともに活動した。

【協力団体】

千代田日本語の会

城西大学経済学部 勝浦ゼミナール

「つるがしマルシェ」(2017 年 10 月 1 日 東武東上線若葉駅前広場 主催：城西大学勝浦ゼミナール)

【担当者より】

共生社会というテーマは、SGH である本校に大いに当て嵌まる。また、学校近辺のイベントである「つるがしマルシェ」に携わったことは、地域、外国人、そして城西大学という 3 つのステイクホルダーと共に企画に携わる良い経験になったようである。さらに、外国人への日本語支援ボランティアに継続的に関わったことは、共生社会を実現するうえで地に足の着いた活動であり、評価に値する。

(吉田賢一)

D グループ 4 班

「企画名：イスラーム×食＝共生 ―ハラール食向けピクトグラムの作成―」

【活動概要】

近年、外国人旅行者が増加している。それに伴い、イスラーム教徒の方も日本で多く見受けられるようになった。特に、筑波大学と本校は、東南アジアに力を入れており、マレーシアやインドネシアから多数のイスラーム教徒の留学生を受け入れている。しかしながら、ハラール認証を受けた食品を探すのは非常に困難である。そのため、豚肉やアルコールを用いていない食品につける「ピクトグラム」を作成し、川越のお土産屋や食品店に掲示してもら

えるように交渉した。

【協力団体】

ハラルメディアジャパン株式会社

【担当者より】

ピクトグラムを作成する際、ハラルメディアジャパン株式会社を訪問し、デザインについてアドバイスを受けた点を評価したい。また、作成したピクトグラムのわかりやすさや妥当性を判断するために、留学生や空港でのインタビュー活動を行ったことも、評価に値する。ただ、川越の企業からはピクトグラムの使用を断られてしまったことが悔やまれる。

(吉田賢一)

D グループ 5 班

「企画名：α企画 防災倉庫改良協計画」

【活動概要】

この班は、「災害大国ニッポン」と「訪日外国人旅行者」のふたつのキーワードに着目した。すなわち、訪日外国人が増加しつつある中、日本におけるイスラーム教徒向けの防災対策はどの程度進んでいるのか、という課題を設定した。本校の防災倉庫を調べたところ、イスラーム教徒向けの「ハラル認証」を受けた非常食が完備されていないことが判明した。そのたえ、文化祭での募金活動、近隣中学校の防災倉庫との比較を行い、最終的にハラル認証非常食である「α米」を本校防災倉庫に置くことができた。

【協力団体】

東京ジャーミイ（モスク）

坂戸市立坂戸中学校

【担当者より】

この班は、課題設定に時間を要したが、災害と外国人というふたつのキーワードを結び付け、最終的には課題設定に成功した。調査の段階で、近隣中学校ではハラル認証を受けた非常食が完備されていることが判明し、イスラームの留学生を多く受け入れている本校の態勢の不備が明らかになった。この調査がきっかけとなり、本校もハラル認証非常食を設置するに至った。

(吉田賢一)

D グループ 6 班

「企画名：ファストファッションの光と影 中学生と取り組む国際協力」

【活動概要】

大量に廃棄される衣料品、開発途上国の劣悪な縫製工場で働く労働者……。近年、ファストファッションの抱える問題点がクローズアップされている。このグループは、ファストファッションの問題点について調査し、課題解決のために未来の消費者である「中学生」にファストファッションの光と影を教える活動に取り組んだ。近隣中学校での出前授業や不要となった衣料品を回収し、UNQLO「服の力プロジェクト」に衣料品を提供した。

【協力団体】

坂戸市立若宮中学校

株式会社ファーストリテイリング

【担当者より】

一年次必修教科目「グローバル・ライフ」で、ファストファッションの光と影についてディベートに取り組んだ。その内容を活かし、課題設定と解決活動を策定した。限られた時間の中で、近隣中学校と交渉し出前授業までこぎつけたことは、評価に値する。また、衣料品の回収活動は、近隣の複数の小中学校で実施し、かなりの量の衣料品を回収することができた。

(吉田賢一)

D グループ 7 班

「企画名：イスラームマニュアル in TSUKUSAKA」

【活動概要】

この班は、本校の留学生の受け入れ状況に焦点を絞った。すなわち、毎年 10 名前後のイスラーム教徒の生徒を受け入れ、ホームステイも斡旋しているにも関わらず、イスラームについて紹介した冊子が、本校には存在しないのである。ホームステイの受け入れ先としては、宗教上食せないものはあるか、タブーとなる行為はあるかなど、知りたい情報はたくさんある。そのため、イスラームの留学生を快適に受け入れるために、イスラームの基本情報を紹介したマニュアルを作成した、

【協力団体】

ファミリーマート 若葉駅前店

【担当者より】

この班は、身近な本校の抱える課題に照明を当てた。注目すべきことは、ファミリーマートで販売されているほぼ全ての食品の原料を調べ、豚やアルコールが含まれていないかどうかチェックしたことである。かなり時間を要する作業だったが完了し、2018 年 1 月のホームステイから実際に活用し、効果を検証する予定である。

(吉田賢一)